

# NP6読解表現の成果と課題

—オンライン授業を実施して—

石川 公子 馬場 典子

## 要 旨

NP6 読解表現は、NP2 取得を目標とする中級後半～中上級段階の学習者を対象としているクラスである。

筆者らは、2019年度も同科目を担当した。本稿は、2019年度の教室での授業とも比較しつつ、初めての試みとなるオンライン授業の実践を通して留意した点や得られた成果、そして今後の課題について報告するものである。

具体的には、「要約小テスト」「記者のコラムを紹介しよう」「書評を書いてみよう」の3種類の授業を取り上げる。それぞれの授業で、ZOOMの「画面共有」機能によってペアワークが活性化した点、NUCT (Nagoya University Collaboration and course Tools)<sup>1</sup>の「課題」機能によって提出物の返却時に学習者の自律学習が促された点、NUCTの「リソース」機能によって学習者が隙間時間を有効に活用できていた点などの成果が得られた。

## キーワード

読解表現、中級後半～中上級段階、オンライン授業

### 1. はじめに

NP6 レベルはNP2 取得を目標とする中級後半～中上級段階の学習者を対象としているクラスである。本稿は、2020年度春学期（4月17日～8月4日の期間内に30回）のNP6 読解表現の実践報告である。

初回のオリエンテーション・レベルチェック後の授業は、以下のような流れで進めた。

・導入編：「話し言葉と書き言葉」と「要約のしかた」の教材を配布し、

復習と練習（1コマ）

- ・基礎編（テキスト使用）：『話す・書くにつながる！日本語読解 中上級』の1課～6課の読解と発展練習（要約小テスト、本文精読、音読、内容確認、発表や作文の発展、作文のフィードバック）（1課につき約2～4コマ）
- ・応用編（生教材使用）：「記者のコラムを紹介しよう」（3コマ）と「書評を書いてみよう」（約6コマ）

筆者らは2019年度も同科目を担当した。本稿では、2019年度の教室での授業とも比較しつつ、初めての試みとなるオンライン授業の実践を通して留意した点や得られた成果、そして今後の課題について報告する。

## 2. NUCTの機能「課題」を用いた要約小テストの成果

### 2. 1 授業目標・教材・進め方

NP6読解表現の授業では、1課から6課までの毎課1コマ目に要約小テスト（15分）を課した。要約小テストとは、テキスト本文を100～140字程度にまとめるというものである。

要約小テストはNUCTの「小テスト」機能は使わず、「課題」の機能を使用した。実際にはNUCT「課題」に書かれている「1課の要約をしてください。15分ぐらいでやってください。」という教師の指示を見て、学習者は要約シートをダウンロードして記入し、NUCTの「課題」にアップロードして提出する。

要約小テストの一例（1課分）を以下に挙げる。

「目指すのは本物」 ID ( ) 名前 ( )

授業前の準備の確認1（小テスト）= 質問の答えをまとめて書く（15分）

1-1) 質問の答えをまとめて書く

この文章の話題・テーマ、目的、概要（だれが、どこで、何のために、どんなことをどうやったのか）を、「である体」で100～130字以内にまとめて要約してください。できるだけ（文章そのままではなく）自分のことばで書いてください。文章を見ながら書いてもいいです。

文の最後に字数を書いてください。

(        字)

## 2. 2 NUCT「課題」機能を使用した成果と課題

要約小テストを実施しての成果は以下のとおりである。

紙媒体の小テストでは、非漢字圏の学習者が漢字圏の学習者に比べ、漢字力と書くスピードに差があることから、時間がかかる場合も見られた。しかしながらこれは本来要約能力以外の要素である。これに対し、オンラインでパソコンを使用しての小テストの実施においては、この問題は排除されたと考えられる。また、手書きの場合は大幅に書き直そうとすれば、それなりの時間を要する。実際に2019年度では、大幅な書き直しを試みたことにより、時間切れになって完成しないまま提出したケースが見られたが、オンライン授業においてはそれを容易に行うことができたと推察される。また、NUCTで返却することで、もう一人の担当者もテスト内容をいつでも見ることができた。これに対し紙媒体は担当者が返却すれば手元に残らず、必要な場合はコピーまたはスキャンして保存する必要があった。

また課題としては、以下の点が残された。それは要約小テストを学習者が同時に開始することができなかったことである。小テスト開始を授業開始時間に設定したが、その時間に開けない学習者もあり、開始時間に差が生じた。これはシステム上のタイムラグが数秒から数十秒程度あることが原因だと思われる。また、提出の際にも、教師がNUCTの画面上で提出を確認するまでも数十秒のタイムラグがあった。これに対し教室授業においては、直接配布し受け取るのが可能である。

### 3. 「記者のコラムを紹介しよう」における成果

#### 3. 1 授業目標・教材・進め方

「記者のコラムを紹介しよう」は、テキストの7課「誰もがジャーナリストになれる」の学習後に、応用的な位置づけとして行う情報伝達型の授業である。テキスト7課では、現代ではソーシャルメディアを活用することにより、誰もがジャーナリストとして社会を変えることができるようになったこと、そして、情報を発信するには責任が伴うということについて学習する。その後、新聞記者の書いたコラムを読み、伝え合い、ジャーナリストとしての心構えや情報を発信する際の責任や役割についてさらに理解を深めることが目標である。

教材として、中日新聞「中部9県2017下半期コラム集 [上]」（2018年3月19日付）を使用した。このコラム集には中部9県各支局の8名の記者が執筆したコラムが文字数300字～400字程度で掲載されている。

次のような流れで実施した。

##### 1回目（7月3日）：授業説明、コラム選びと読解準備

8つの「記者のコラム」から1つ選び、読解する。漢字の読みや言葉の意味を調べる。

##### 2回目（7月7日）：教師への質問・音読確認・シートに記入

わからなかった言葉の意味などを教師に質問し、音読をする。また、読んだ記事の要約と記者が伝えなかったことやジャーナリストとしての心構え、また自分の感想を準備シートに記入し、発表日までにNUCT「課題」に提出する。

以下に準備シートを示す。

準備シート

7課 コラムを読んで相手にわかりやすく伝える

## 新聞記事のコラム

タイトル

要約

記者が言いたかったこと・ジャーナリストとしての心構え

感想

## 3回目（7月14日）：発表

- ① ペアになり、自分の選んだ記事を音読した後、相手にわかるように説明する。
- ② 聞いている人は、記事の概要と感想をシートに記入する。
- ③ ペアで話し合い、概要を確認し、記者が感じたことについて話し合う。  
※①～③で15分程度。チェンジして同様に発表。その後、ペアを変え、同様に発表し合う。
- ④ 最後に全体で、コラムを読んだ感想や、ジャーナリストの役割や心構えなどを話し合う。  
※自分が聞いた記事の概要と感想を記入したシートをNUCT「課題」に提出する。

### 3. 2 留意点と成果

#### 3. 2. 1 NUCT「課題」による迅速で効率的な回収と返却

3. 1の進め方の2回目で示したように、準備シートをその授業時間にNUCT「課題」から配信し、翌週の発表日の授業時間までに「課題」に提出するという指示を出した。ところが、授業日当日に提出するなど、予想していたよりも早く学習者から提出があったため、発表前に添削して返却することとした。

2019年度の教室授業では、教師が授業で教室に行って初めて可能だった回収と返却という一連の作業が、NUCTの機能を使うことによって、授業後1週間以内に効率良く行われたというわけである。これはNUCT「課題」による成果だと言える。

また、このことは、言い換えれば、教室授業の場合よりも、教師が学習者の提出物をこまめにチェックし、添削し、返却したということでもあり、学習者とのやりとりの頻度を増やしたことは、オンライン授業を実施する上での留意点のひとつであったとも言える。

#### 3. 2. 2 返却時に見られたNUCT「課題」の自律学習を促す機能

効率的なNUCT「課題」による返却は、学習者の自律学習を促す役割もあった。NUCT「課題」から返却する際は、NUCT「課題」の設定で「受講者に対して採点結果を開示する際にメール通知する」をチェックしておく、学習者に返却されたことが知らされる。「記者のコラムを紹介しよう」の2回目に提出された準備シートは、数日中に返却し通知された。発表の際にはチェックした箇所が訂正されていたため、学習者は発表日までに自主的に準備シートを見て、訂正し、発表に臨んだことがわかる。つまり、学習者に返却があったことを通知するNUCT「課題」の機能が、学習者の自律学習を促したということである<sup>2</sup>。

### 3. 2. 3 ZOOMのブレイクアウトルームで画面共有を取り入れた発表

発表では、ZOOMのブレイクアウトルームの機能によってペアワークがスムーズに行えた。とくに、ブレイクアウトルームでお互いに画面共有ができる点は、ペアワークをより活性化させられる利点であった。

具体的に見ていこう。「記者のコラムを紹介しよう」では、文字言語には頼らず、できるだけ音声言語で伝えるように学習者に指示をしたが、写真などの視覚資料がないと理解が困難な場合も予想された。そのため、必要な場合は、音声言語のみで情報伝達を終えたタイミングで、視覚資料を画面共有してもよいことを事前に伝えておいた。その結果、学習者たちは発表時に写真や動画の視覚資料を効果的に取り入れていた。

以下に、3名の学習者が選んだコラム名・概要と使用した視覚資料を示す。

コラム名・概要	使用した視覚資料
「夏目さん」 日米親善の一つである人形外交の調査に尽力した夏目氏を偲ぶ記事	アメリカから贈られた「青い目の人形」とその答礼人形の「ミス愛知」(写真)
「マスいっぱい」 大相撲名古屋場所ののぼりを制作している吉田旗店の思いを伝える記事	相撲文字・名古屋場所の相撲ののぼり(写真)、吉田旗店の制作場面(動画)
「牧師の手話」 新郎の両親に聴覚障害があるため牧師がサブライズで手話を使った結婚式に参列した記者がその様子を伝える記事	手話「おめでとー」「ありがとう」(イラスト)

上記のうち、とくに「マスいっぱい」というコラムには、「お客さんがたくさん入るよう、マス目いっぱい」や「上の方が字が大きいのは、見上げたとき全部同じ大きさに見えるから」というくだりがあるが、これは相撲文字や相撲ののぼりを知らない人には言語だけではなかなか伝えら

れない部分である。このコラムを選んだ学習者は、事前に、相撲ののほりについてネットで調べており、情報を伝えた後、ペアの相手に視覚資料を見せ理解を促していた。また、このコラムを選んだ学習者は、自国に帰国したため、通信環境の違いによりビデオ機能が使えなかった。他の学習者はビデオをオンにして顔を見せて授業に参加していて、1人だけ顔が見られなかったため違和感があったが、ペアワークでは、動画を共有し、教室で行うような自然なやりとりが行われていた。

このように、ZOOMによるペアワーク時の画面共有を通して、視覚資料を適切に使用できたことで、教室でのペアワークとまったく同質の効果が得られたと言える。むしろ教室ではパソコン持参という制約やスマートフォンの画面サイズの制約等を考えると、教室授業以上の利便性と成果があったと言ってもいいだろう。

#### 4. 「書評を書いてみよう」における成果

##### 4. 1 授業の概要と目標・教材・進め方

まず、授業概要は以下のとおりである。

6月19日 小作品配布（NUCTの「リソース」からダウンロードし、学習者は空き時間を利用して読み進め、原稿を書き始める）

6月23日 授業の後半の時間を使い、作品の内容についての質問を受け付ける。

7月10日 同様

7月14日 同様（同日12：00までに原稿をNUCT「課題」に提出）

7月17日 原稿チェック（ブレイクアウトルームで一人ずつフィードバック）（7月19日までに修正原稿をNUCT「課題」に提出）

7月21日 修正原稿再チェック（再チェックが終わった人は最終原稿を発表日までに、単語表を7月25日までにNUCTの「課題」に提出）

7月28日 単語表チェック（修正版をそれぞれの発表日にNUCTの「課題」に提出）、原稿音読チェック



7月31日 発表1回目（教師が発表者の単語表を ZOOM で画面共有）  
（発表を聞いた人はコメント用紙に記入して NUCT の「課題」  
に提出）

8月4日 発表2回目（教師が発表者の単語表を ZOOM で画面共有）  
（発表を聞いた人はコメント用紙に記入して NUCT の「課題」  
に提出）

目標は、加工されていない生の短編小説を読むこと、そして今までの課で練習してきた「大意をとり、要点をわかりやすく伝えること」を生かして、書評を書き、発表することである。

進め方は、まず、資料配布前の「書評を書いてみよう」の最初の授業で、準備から発表までの流れを説明し、そののち、NUCT の「メッセージ」に以下の文書を添付した。学習者の希望を聞いたあと、学習者は各担当の作品を NUCT の「リソース」からダウンロードして読み始めた。

「書評を書いてみよう」の最初の授業で配布した文書（原文のまま）は次のとおりである。

NP6 読解表現（2020.6.19 馬場）

19日の授業の最後で説明したように、NUCT に4作品をアップしました。

- ・「現代の人生」星新一（ほし・しんいち）
- ・「生活維持省」星新一（ほし・しんいち）
- ・「バスに乗って」重松清（しげまつ・きよし）
- ・「鍋セット」角田光代（かくた・みつよ）

時間があるときに、4つの作品のはじめの部分（数行～1ページぐらい）を読んでみてください。

時間のない人は、タイトルだけ見て決めてもいいです。

自分の読みたい作品を、第1希望、第2希望と決めてください。「どれでもよい」場合は、□で囲ってください（どれでもよい）。

【名前：（自分の名前を書く）】

※第1希望（作品名を書く）：

※第2希望（作品名を書く）：

※どれでもよい

6月23日の石川先生の授業までに、メッセージに返信してください。

#### 4. 2 NUCT と ZOOM を利用したことによる成果

2019年度は学習者は原稿・単語表を紙媒体で提出していたが、持参し忘れなどでチェックできなくなり、最終的には教師と学習者でメールのやりとりをする必要がある場合もあった。しかしNUCTの「課題」に期限を設けて提出してもらうこと、修正稿、最終稿の提出にも「課題」の機能を使うことにより、スムーズに原稿を回収でき、もう一人の担当者とも進捗状況を情報共有できた（2019年度では各授業終了時にメモで申し送りまたはメール連絡）。また発表者へのお互いのコメントも「課題」に上げることにより、発表者へ確実にフィードバックができた。また、だれがどの作品を読むかについても、教室授業では、紙媒体を教師が各作品1部ずつを用意し、その場の短い時間で数作品を読み、決定してもらわなければならなかった。これに対し、NUCTとZOOMを用いての授業においては、NUCTの「リソース」に作品をアップロードしておくことにより、学習者が時間のあるときに好きな作品を読むことができ、余裕をもって担当作品を決められた。

また、教室授業では、発表原稿を時間内にフィードバックできない場合、メールでやりとりするしか方法がなく、修正稿を回収するまでに時間がかった。しかし、ZOOMを用いての授業においては、時間外でも話し合う時間を別に設けることができ、フィードバックと修正稿の回収がスムーズに行われた。

こうしてみると、NUCTとZOOMによるオンライン授業では、問題点はほぼ見られず、成果が多いことがわかる。

#### 5. まとめ ー成果と今後に向けてー

以上、オンライン授業の実践を2019年度の教室授業と比較した結果、多くの成果が見られた。改めて以下に記す。

##### (1) NUCT「課題」を中心とした各機能の効果

###### ①効果的な回収と返却：

NUCT「課題」から返却する際、「受講者に対して採点結果を開

示す際にメール通知する」というチェック機能の利用により、学習者に返却されたことが知らされる。これにより、返却されたシートを自主的に見直す、学習者の「自律学習」が促された。

②提出物のフィードバックに関する学習者の自律学習：

提出物のフィードバックをする際、教師が予め授業開始前に、チェック済みの作文を NUCT「課題」で返却しておくことにより、学習者が自発的に作文の間違いを直して授業に臨む姿が見られた。

③要約小テスト作成時間短縮効果：

学習者がパソコンで書き込むことができるため、書き直し時間の大幅な短縮が可能になった。特に非漢字圏の学習者には有効であり、書くことに慣れている学習者にとっても、書き直しにはパソコンは負担が少ないと思われる。

④共有機能・保存機能：

NUCTの「課題」に提出してもらうことで、教師は自分の担当外の課題でも、提出状況や提出内容を随時閲覧することが可能である。

⑤提出期限設定機能とスムーズな回収機能：

NUCT「課題」に提出期限を設定することにより、学習者の提出状況（遅延も含め）が把握できる。また、原稿の再提出などもこの「課題」機能を利用することによって、スムーズに回収できた。

⑥教師間における学習者の進捗の共有機能：

NUCTの各機能（「課題」「メッセージ」など）を使うことにより、学習者の進捗状況などを教師間で随時共有できた。

⑦発表者への確実なフィードバック効果：

発表者へのコメントを NUCT「課題」にあげることにより、コメントが確実に提出され、発表者へフィードバックができた。

⑧「リソース」利用による、学習者の隙間時間の有効活用：

教室授業では授業時間内のみ学習者が閲覧できる資料（例：短編小説のコピー）を、「リソース」にあげておくことによって、学習

者が好きな時間に読むことができた。

(2) ZOOM による効果

①ペアワーク時における「画面共有」の利便性：

ペアワークをブレイクアウトルームで行う際、ペアで資料を画面共有することにより、音声言語だけでは理解しにくいこともスムーズに理解ができた。特にスマートフォンなどの制約された画面ではなく、パソコン画面で共有できることは、学習者にとって有益である。

②発表時における「画面共有」による学習者の負担軽減効果：

学習者の発表時、教師が ZOOM で画面共有し、サポートすることによって、発表者の負担を軽減し発表に集中してもらうことができた。

③学習者と教師との授業時間外でのスムーズなコミュニケーションと短期間での修正稿回収：

発表原稿のフィードバックでやむを得ず授業外での話し合いが必要な場合でも、学習者と連絡を取り合い、ZOOM でスムーズにフィードバックができた。その結果、メールでのやりとりに比べ短期間で修正稿の回収が可能になった。

以上のようにオンライン授業で、教室授業と同質の、あるいはそれ以上の成果が得られたことがわかった。さらには今後に向けて、次のような点を検討していきたい。

ZOOM の画面共有は、動画や写真などを共有することができペアワークなどのグループワークを活性化することができるが、お互いの意見を書き込んでいくような活動の場合は、提供した本人しか書き込みができないというのが難点である。それに対して、グーグルドキュメントは、その URL を共有し編集者の機能が与えられれば、全員が同時に書き込めるという利点がある。すでに他の多くの授業で活用されているが、今後の NP 6 読解表現のオンライン授業にもその利点を生かしてさらに双方向性

を補強していきたい。

また、発表を行う際は、発表後に聞いている人から発表についてのコメントを記入してもらい、そのコメントを発表者に見せ、フィードバックを行う方法が教室活動ではよく用いられる。オンライン授業では、お互いの発表や作文についてコメントし合うのに、NUCTの「フォーラム」がすでに他の多くの授業で活用されている。これに加えて、グーグルフォームは、コメント記入画面を開くまでの手間が少ないという利点や、回答結果が容易に集計されるという利点がある。コメントを共有するためには、スプレッドシートの形にしたりコピーしてメールに添付するなどひと手間必要であるが、お互いのコメントを共有し合うことができ利便性が高いと言える。それぞれのツールの特徴を生かし、授業により適した方法を模索していきたい。

オンライン授業は、パソコンの通信環境さえ整っていれば、クラスワークが可能となるため、感染症拡大の状況をはじめ通学が困難となる状況下においては、今後も引き続き実施されていく授業形態であろう。オンライン授業の進め方については、教育の場で日々新しい方法が試行されている。それらについて今後も積極的に学び、授業改善に努めていきたい。

## 注

- 1 NUCTとは、名古屋大学情報連携統括本部によって運営されている e-Learning システムである。
- 2 返却時の効率的で自律学習を促す NUCT「課題」の機能は、作文返却時にも生かされた。NP6 読解表現では、テキスト学習の各課の最終段階で作文が課され、学習者は約1週間の期限で作文をNUCT「課題」に提出し、そのさらに約1週間後の授業で学習者は教師と1対1で作文のフィードバックを受ける。作文授業はこのような流れで行っていた。2019年度の教室授業では、担当教師はフィードバックの授業時間に添削を終えた作文を直接手渡しで返却していたが、オンライン授業では、授業時間になってNUCT「課題」から返却していると、その操作時間の数分が授業時間に食い込むことになる。そのため、2020年度春学期は、授業時間よりも少し前に返却するようにしていた。学習者は、返却さ

れたことが通知されると、フィードバック時間までに自分の添削された作文を自主的に読み返し、教師からのコメントについて考える時間がとれた。その結果、学習者たちは、フィードバックの際に「この表現はなぜ使えないのか」「自分が言いたいことはこういうことだが、この表現なら使えるか」など前向きに質問するようになっていた。つまり、NUCT「課題」によって作文の返却が効果的に行われ、「返却通知機能」により自律的な学習が促されたと言える。

## 引用文献

- 小野恵久子・遠藤千鶴・大久保伸枝・山中みどり（2016）『話す・書くにつながる！日本語読解 中上級』アルク
- 角田光代（2019）「鍋セット」『NHK 国際放送が選んだ日本の名作』双葉社
- 重松清（2019）「バスに乗って」『NHK 国際放送が選んだ日本の名作』双葉社
- 星新一（1972）「生活維持省」『ボッコちゃん』新潮社
- 星新一（1985）「現代の人生」『ノックの音が』新潮社

## 参考 URL

[https://media.itc.nagoya-u.ac.jp/nuct\\_how\\_to\\_use\\_2020/](https://media.itc.nagoya-u.ac.jp/nuct_how_to_use_2020/)